

## 190. 坊袋遺跡出土の 弥生式土器

—文様の分析を中心に—

はじめに

坊袋遺跡は、栗太郡栗東町の北西に位置し、葉山川と金勝川に挟まれた沖積平野に存在する。

昭和61年度の調査で、弥生時代中期後葉の土坑が3基確認されたのが契機となり、隣接地の調査が相次いで行なわれた。昭和62年度の2回に渡る調査では、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭を中心とする、掘立柱建物と堅穴式住居を混在させた集落が確認され、まわりには2条の併行する溝が巡っていた。

今回は、昭和61年度調査において出土した土器を紹介し、主に文様の分析を通じて、地域性、地域間交流等について若干述べてみたい。

### 2. 出土土器

出土した土器は、3基の土坑から出土したもので、出土地点は図3・4に示した。以下、土器の観察を試みよう。

壺A(1・4・5)口縁部が外反して開き、端部に面をもつもの(広口壺)で、(4)は端部下端をやや垂下させる。調整および文様は、内面にヘラによる山形文を施すもの(1)や、(5)のように口縁外面に列点を施し、内面にハケ目調整を施すものがある。(4)は、口縁端部にナデを施し、以下ハケ目調整したものである。

壺B(2・3・21)外上方にのびる頸部から、口縁部が屈曲し、内傾もしくはやや直立気味にのびるもの(受口壺)。調整は、口縁部外面にヘラによる斜格子文を施すもの(2)や、鋸歯文と斜線文を組み合わせたもの(21)がある。(3)は、壺Bの頸部から体部にかけての破片と思われ、外面にヘラによる刻みをもち、内面にハケ目調整を施す。

甕A(9・10)くの字状に外反する口縁部をもち、端部に面をもつ(くの字状口縁甕)。(9)の外面にはタスキ調整が施される。

甕B(11~18・22・24・25)外反する口縁の端部が内傾もしくは、直立気味にのびるもの(受口状口縁甕)。調整は、口縁部にハケ目調整の後、端部を中心にナデを施したものの(13)と、列点とハケ目を混えたもの(14)、

列点のみもの(12・15・17・22・24)、波状文を施したものの(16)、ヘラによる山形文を施したものの(11・18)がある。また、内面にはハケ目および列点を施したものがほとんどで、列点文では、(22)のように山形状に施したものがみられる。体部は、直線文、列点文、連弧文によって構成されている。底部には(8・19・20)がある。

高杯(23)やや深い椀状の体部から、ゆるやかに屈曲し、長く直線的にたちあがるものである。口縁外面上方には、凹線が施されている。

鉢(6)直立気味の体部から口縁に向かってゆるやかに外反し、端部に面をもつ。体部外面には、凹線状の段をもつ。

蓋(7)小さく突出したつまみ部から、裾部がひらいて笠型を呈するものと思われる。

次に、土器の時期について考えてみよう。それぞれの遺構で器種が揃っている状況ではないので、主に変化のとらえやすい甕Bを基準<sup>①</sup>に、他の遺跡例も参考にしながら考えていく。甕Bが8点出土しているSK-3では、口縁外面が列点のみによって構成するものの中に、わずかにハケ目調整の後、上端にナデを施すものが含まれている段階で、ハケ目調整を施さず、列点を主体とする土器群で構成される段階より1段階古いものとしてひかえられる。SK-1においても、列点の特徴や形態自身がSK-3出土の土器に共通点がみられることから、ほぼ同時期のものと思われる。野洲川左岸守山地区<sup>②</sup>との併行関係を考えれば、下ノ郷遺跡の第3環濠の資料ほど口縁外面にハケ目を施す土器が主流をなしていないが、列点を主体とする二ノ畦<sup>③</sup>や横枕<sup>④</sup>遺跡の土器よりも古い様相をもち、その中間にあたる下ノ郷遺跡の第2環濠の資料および吉身西遺跡の周溝墓資料が比較的近い段階にあたるものと思われる。またSK-2においては、甕Bが出土していないので、同じレベルでは扱いにくいですが、壺Aの特徴は下ノ郷遺跡の第3環濠出土のものに類似点がみられ、SK-1・3よりやや先行する可能性がある。3つの土坑は、おおむね弥生中期後葉を3段階に分けた場合の中段階のものとしていいと思われる。既に発表されている編年に照らし合わせるならば、大橋<sup>⑤</sup>Ⅲ期、伴野<sup>⑥</sup>Ⅳ-3・4、岩崎<sup>⑦</sup>Ⅳ-中・新、兼康<sup>⑧</sup>Ⅳ-3にそれぞれ比定される。以前、下鈞遺跡昭和60年度調査(以下、下



鈎60とする)出土の土器が、ハケ目を施さない、列点を主体とする段階で、IV様式における最末期の土器群として報告した<sup>⑦</sup>ことがあるが同じ下鈎遺跡でも、昭和58年度調査(以下、下鈎58とする)の溝および包含層等から出土した土器群は、坊袋遺跡SK-3に比較的近い様相をもっている。従って、坊袋SK-2→坊袋SK-3・下鈎58→下鈎60という順番が考えられる。

### 3. 文様の分析

#### 1) 壺Bにみる文様について

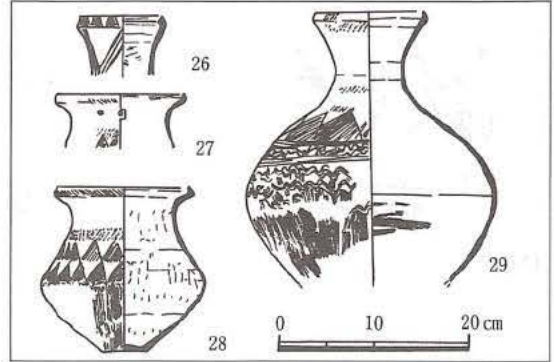
ここでは、壺Bの口縁外面に施されていた鋸齒文、斜格子文について述べてみたい。

鋸齒文は、弥生時代後期の器台によくみられる文様であるが、近江における弥生中期の出土例としては、壺A、壺B等に施したものがわずかにみられる(図1)。施文部位は、坊袋<sup>(2)</sup>や五ノ里遺跡例<sup>(26)</sup>のように壺Bの口縁外面に施すものと、下ノ郷(27・28)や吉身西遺跡例<sup>(29)</sup>のように壺A・壺Bの体部外面に施すものがある。<sup>(27)(28)</sup>は、形態的に甕Bと類似したもので、在地色の強いものである。鋸齒文は、前述したように弥生時代中期においては、類例が少ないので断断はできないが、あえて現段階の状況において中心地域を想定するならば、野洲川周辺地域にあったのではないかと考えられる。また、近江における鋸齒文出現の背景において、他地域との関連を考えるならば、鋸齒文を施す土器が主に出土している摂津、播磨、尾張等、いずれかの地域との関連が考えられる。摂津、播磨の例では、高杯や器台に施すものが主流で、壺の体部に施すものとしては、尾張の阿弥陀寺遺跡等でみられる。へら描山形文との関連を考えるならば、東海との関連が想定できるが、東海においても中心をなす文様とはいえないので、播磨、摂津ルートの可能性も残しておきたい。

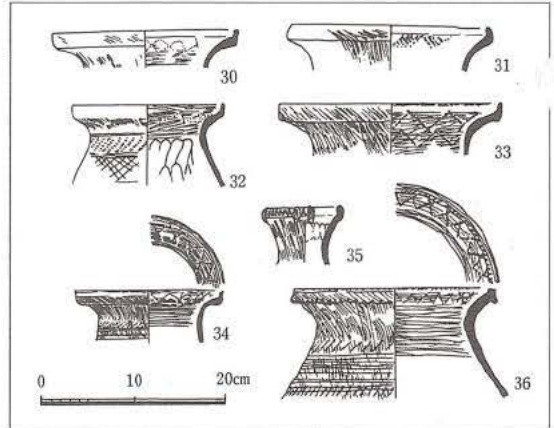
次に斜格子文であるが、壺Bの口縁外面に施したもののとして、近江では日野町内池遺跡、竜王町堤ヶ谷遺跡、守山市小津浜遺跡、同服部遺跡等、弥生中期後葉の古段階から中段階にかけての比較的古い段階を中心にみられる。また、壺Bの口縁外面に施すものは量的に多いものではないが、壺Bや甕Bの体部外面に施すものはよくみられる。近江以外では、三重県亀山市地蔵僧遺跡、同大鼻遺跡等近江との関連が強い伊勢北部地域で類例がみられる。

#### 2) 甕Bにみる文様について

表1は、甕Bの口縁外面にみる文様を、坊袋遺跡も含めた葉山川流域(以下葉山川地区とする)の遺跡と野洲川左岸守山地区(以下守山地区とする)の遺跡<sup>⑧</sup>を比較したものである。時期的にはややばらつきがあり問題もあるが、ほぼ弥生中期後葉の中段階から新段階に含まれるもので、参考にあげさせてもらった。葉山川地区と守山地区の文様にみる違いは、葉山川地区で



図一 鋸齒文をもつ弥生時代中期の土器

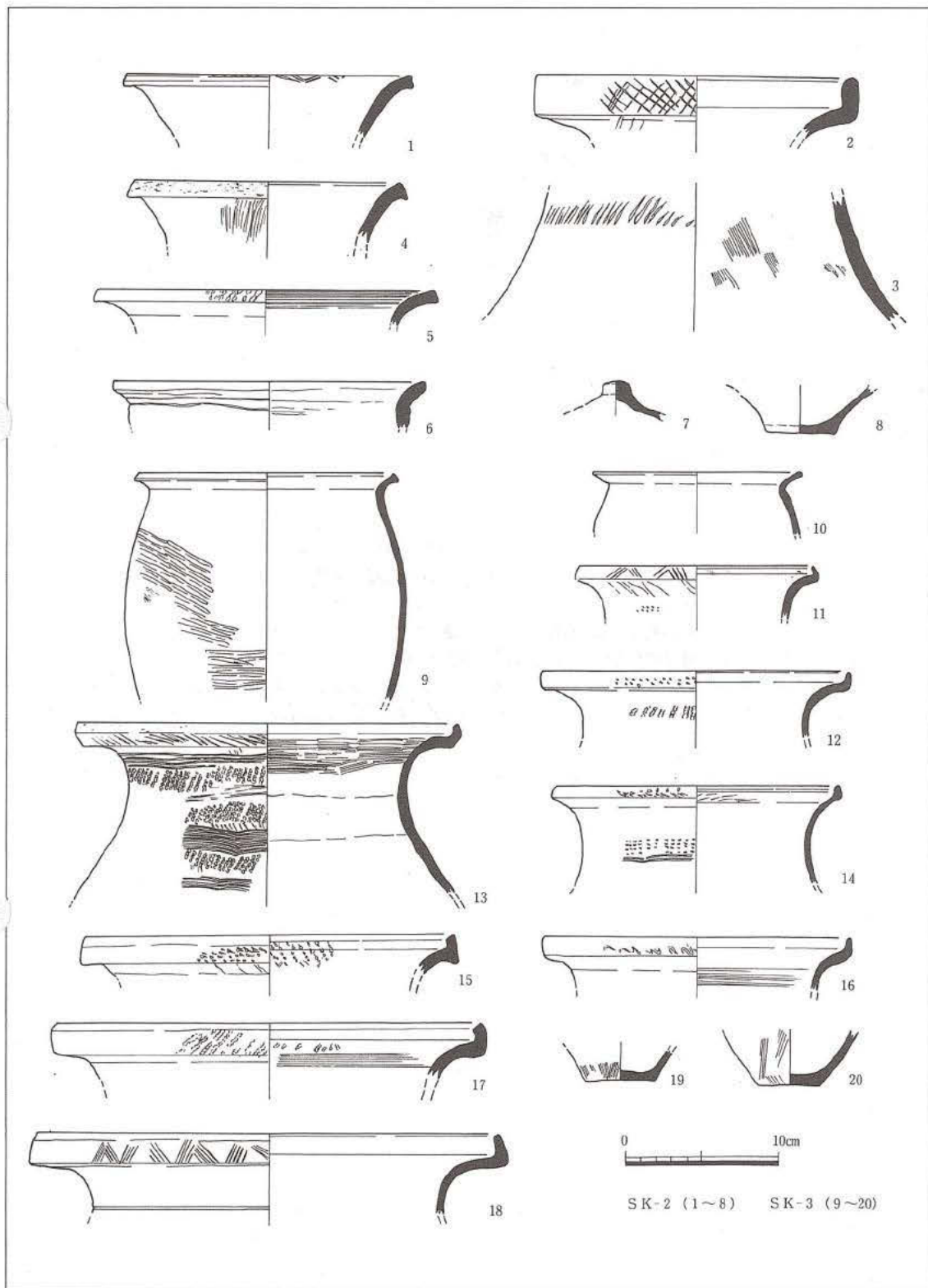


図二 服部遺跡出土の山形列点文をもつ土器

は縦位直線文が多く用いられていることはすでに述べたとおりである。それに対して守山地区では、渦文や波状文が多く出土している。渦文は、甕Bではそれほど両地域に大きな差はみられないが、壺Bの口縁外面に施されたものを含めて考えれば<sup>⑨</sup>守山地区に渦文が多いことがいえる。波状文では、守山地区というより二ノ畦遺跡において出土量が多いというべきであろう。隣接して存在する横枕遺跡では、やや二ノ畦遺跡より新しい時期の土器とはいえ、時期差はそれほどないのに、2点しか出土していない。また、葉山川地区でも、坊袋遺跡2点、下鈎遺跡3点の計5点しか出土していない。波状文は弥生中期後葉の古段階から中段階にかけてよくみられる文様だが、新段階になると減少する傾向にある文様なので、二ノ畦遺跡の場合は、土器に古い様相を強く残した例として特徴づけられる。

では次に内面の文様として、山形列点文についてとりあげてみよう。

坊袋遺跡例にみられるような山形列点文は、口縁の外面に施すものと、内面に施すものが存在する。外面に施すものは、内面に施すものに比べ量的に少ないが、服部遺跡、近江町法勝寺遺跡、大津市滋賀里遺跡



图一三 坊袋遗迹出土土器(I)



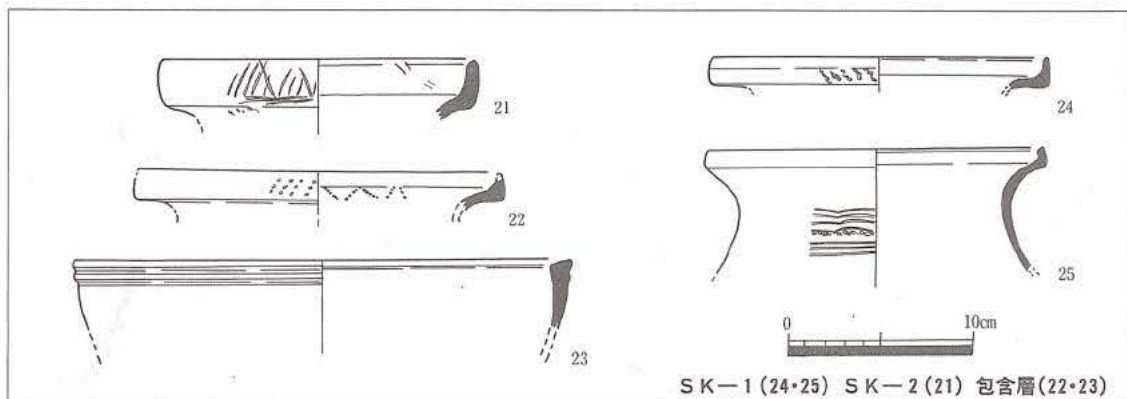


図-4 坊袋遺跡出土土器(2)

等でみられる。器種は壺A、壺B、甕B等さまざまである。内面に施すものとしては、甕Bを中心に湖南、湖東地域でよくみられる。通常、1条で山形列点文を構成するもの(32・34・36)が多い。しかし、服部遺跡では、3～4条の山形列点文によって構成したもの(31)、1条の山形列点文を2段階に配したもの(33)等さまざまなものが存在し且つ量も多く山形列点文の中心地であった可能性が高い。また、山形列点文ではないが、その変形ともいえるX字状に列点を配したもの(30)も多数みられる。このタイプも各地でしばしばみられるが、通常のものと同様に、遺跡単位で1・2点みられる程度で、服部遺跡ほどの出土数はない。一方、他地域に目を転じてみると、三重県津市納所遺跡、四日市市永井遺跡等の伊勢地域で類例がみられる。これらは、壺Bの口縁外面に列点を施したものが主体で、内面に施すものは、近江とは逆にまれである。服部遺跡出土の壺B(35)は、伊勢出土のものと比較的類似しており、両者の関連がよく伺える資料である。

3. まとめ

今回報告した坊袋遺跡出土の土器は、下鈎60の土器より一段階古い様相をもつものとして、葉山川流域における弥生中期後葉の土器を考えるうえで、今後も重要な位置を占めるであろう。また文様の分析からは、葉山川地区と守山地区のそれぞれの特徴が一層明らかになり、鋸歯文や山形列点文等の文様については、野洲川周辺地域の土器が伊勢を中心とする東海との関連が強い土器であることを認識させるものであった。

(近藤 広)

注

- ①ハケ目を主体とする段階(古)、ハケ目にナデもしくは列点等を混ぜる段階(中)、列点を主体とする段階(新)、と仮に分けておく。山崎秀二「下ノ郷遺跡発掘調査概要」(『守山市文化財調査報告書第20冊』守山市教育委員会 1986)によるところが大きい。
- ② 守山地区とは、二ノ畦、横枕、吉身西、下ノ郷等の遺跡が存在する地区をさす。(注⑨文献のC地域)
- ③ 大橋信弥「B・出土土器の問題」(『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ本文編』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会・守山市教育委員会 1986)
- ④ 伴野幸一(『二ノ畦遺跡発掘調査報告書』守山市教育委員会、守山市埋蔵文化財センター 1988)
- ⑤ 岩崎直也(「邪馬台国前夜の近江-弥生土器から-」『滋賀考古』創刊号 滋賀考古学研究会 1989)
- ⑥ 兼康保明(「9. 近江地域」『弥生土器の様式と編年』近畿II 木耳社 1990)
- ⑦ 近藤広(「下鈎遺跡出土の弥生式土器(1)」『栗東の文化』26号 (財)栗東町文化体育振興事業団 1990)
- ⑧ ニノ畦と横枕遺跡の土器数は、注④文献、山崎秀二「守山市文化財調査報告書」第26・33冊 守山市教育委員会1987・1989による。
- ⑨ 近藤広(「弥生時代中期後半における文様からみた小地域の検討」『滋賀考古』第2号 滋賀考古学研究会 1989)
- ⑩ 守山地区8点、葉山川地区4点となる。

	甕B口縁外面の文様	守山地区		葉山川地区	
		横枕	二ノ畦	坊袋	下鈎
単一構成	波状	2 (5.3)	11 (22)	2 (20)	3 (5)
	鋸歯	1 (2.6)			2 (4)
	山形	1 (2.6)		2 (20)	3 (5)
	縦直	1 (2.6)			3 (5)
	列点	30 (79)	37 (74)	6 (60)	40 (71)
複数構成	列+波	1 (2.6)			
	列+山		1 (2)		2 (4)
	列+縦				2 (4)
	列+渦	1 (2.6)			
	山+渦	1 (2.6)			
合計		38	50	10	56

表1 甕Bの口縁外面文様比較

( )内は百分率を示す